

『失われた時を求めて』第四篇「ソドムとゴモラ」

(鈴木道彦訳)

心の間歇

私の全人格を動転させる衝撃。到着第一目目の夜から、私は疲労のあまり心臓が発作を起こしたように苦しいので、その胸苦しさを懸命に抑えながら、靴をぬぐためにゆっくりと用心深く身を屈めた。けれどもショートブーツの最初のボタンにふれたとたん、私の胸はある未知の神々しい存在に満たされてふくれあがり、嗚咽が身体を揺り動かし、涙がはらはらと目からあふれ出た。私を助けにかけつけて、魂の枯渇から救いだしてくれた存在、それは数年前、同じような悲嘆と孤独に襲われて自分をことごとく失ってしまった瞬間に、とつぜん入りこんできて私を私自身に返してくれた存在だった。なぜならそれは私であるとともに、私以上のものだったからだ(中身を上まわる容器、しかも私にその中身をもたらしてくれた容器である)。今しがた私は、記憶のなかで認めるところだった、愛情のこもった、心配そうな、またがっかりした祖母の顔、はじめてここに着いた晩とそっくり同じような祖母の顔が、私の疲労の上に屈みこんでいるのを。祖母の顔といっても、今までのようにその死を悲しむ気持が私にほとんど起こらない祖母、そのことを不思議にも思えば、自分にそれを責めてもいた、あの名前だけの祖母ではない。本当の祖母である。シャンゼリゼで彼女が発作を起こして以来、はじ

めて私は無意志的で完全な記憶のなかに、彼女の生き生きとした現実を見出したのだ。こうした現実には、私たちの思考によって再創造されないかぎり、私たちにとって存在しない(さもないければ、壮大な戦闘にまきこまれた人間は、みな偉大な叙事詩人になってしまうだろうから)。こうして、祖母の両腕のなかに飛びこんでいきたいという狂ったような欲望にかられながら、私は今しがた——事実のカレンダーと感情のカレンダーの一致をしばしば妨害するあのアナクロニズムのために、祖母の埋葬から一年以上もたって——はじめて祖母が死んだのを知ったところだった。たしかにあのとき以来、私はよく祖母のことを口にしたり、また祖母のことを考えもしたが、恩知らずで、エゴイストで、残酷な若者であった私の言葉や思考のなかには、いまだかつて祖母に似たものなどこれっぽかりも含まれてはいなかった。なぜなら、軽薄で、快楽好きの私、しかも病気の祖母を見るのに慣れていて私は、かつての祖母の思い出を自分のなかに潜在的な状態でしか持っていないからだ。私たちの魂の富はいくらでも数えあげることができるが、どんな瞬間にその魂を考察しようとも、魂の全体というものはほとんど虚構の価値しか持っていない。なぜなら、現実の富であれ想像のそれであれ、かりに私の場合なら、ゲルマントという古い名前にまつわるものであれ、あるいはそれよりはるかに重大な祖母にかんする真実の思い出という富であれ、あるときは一方の富が、別なときにはもう一方が、自分の思いのままにならないからだ。それというのも、記憶の混乱には心の間歇が結びついているためだ。おそらく、私たちに自分の内部のすべての財産、自分の過去の喜び、自分のいっさいの苦悩を、たえず所有しているかのように想像させるのは、私たちの肉体の存在だろう。これは私たちにとって、自分の精神性を閉じこめている壺に似

ている。おそらくそうした喜びや苦悩が、私たちから逃げていったり戻って来たりすると考えるのも、正しくないだろう。いずれにせよ、それらがたとえ内部に残っているとしても、多くの場合は未知の領域に留まっていて、私たちにとってなんの役にも立たず、またそのなかで最も日常的なものすらも、違った種類の回想のために押し殺されてしまう。その違った種類の回想は、意識のなかで喜びや苦悩と同時に存在することを、いっさい拒んでいるのだ。けれども、そうした感情の保存されている枠組がふたたびとらえられると、今度はそれらの感情が、同じく自分と相容れないいっさいのものを排除して、その感情を体験した自我だけを私たちの内部に確立する力を獲得する。ところで、今しがた私が突然そこへ戻った自我は、バルベックに着いたときに祖母が私の着ているものを脱がせてくれたあのほらかな晩以来、存在していなかったものだから、私はごく自然に、その自我の知らなかった今日の一日のあとにではなく——あたかも時間のなかには異なった系列が併行して存在しているかのように——なんの切れ目もなしにかつての到着第一夜のあとにすぐつづいて、祖母が私の方へと身を屈めた瞬間にびたりと密着したのだった。これほど長いあいだ消滅していた当時の自我が、ふたたび私のすぐそばに来ていたので、ちょうどまだ眠りからさめきれない人にとって、逃れゆく夢のなかの物音が自分のそばに聞こえる気がするように、私にはその直前に発せられた祖母の言葉がまだ耳に残っているように思われたが、しかしそれはもはや一つの夢にすぎなかった。私はもう、祖母の両腕のなかに身をひそめたい、祖母に接吻をして彼女の悲しみの痕を消してしまいたい、とっている存在にすぎない。この存在を想像することは、もしも私が少し前から自分のうちに次々とあらわれては消えていったような存在のどれかだとしたら、ひどく困

難だったろう。ちょうど今は逆に、少なくともしばらくのあいだはそうした少し前の存在でなくなったので、そのような存在の一つが持っていた欲望や喜びを感じようとすると、たいへんな努力、それも不毛な努力が必要であるようなものだ。私は思い出した、祖母がこんなふうはその身をガウンに包んで私のショートブーツの方へと屈みこんだ瞬間よりも一時間ほど前、私は暑さで息苦しいほどになった通りの菓子屋の店先をぶらぶらしながら、祖母を抱きしめたい思いで矢も盾もたまらず、もう祖母なしでは一刻も過ごすことができないと固く信じこんでいたことを。そしてその同じ欲求がよみがえってきた今、私はもう何時間待ってもけっして祖母がやって来てはくれないことを知っていた。私はそれを発見したばかりだった。なぜなら、はじめて祖母のことを、生き生きとした、本物の、張りさけんばかりに私の心をいっぱいにする人と感じ、つまりはようやく彼女を見出しながら、永遠に祖母を失ったのを悟ったところだったからだ。永遠に失ってしまったのだ。私には理解できなかった。そして私はただ、次のような矛盾した苦しみを堪えることにつとめた。一方にはかつて知っていた通りの形で、つまり私のために作られて、私のなかに生き残っている一つの存在、一つの愛情があった。その愛にとっては、すべてが私によって成り立ち、私を目標とし、たえず私に向かっていったから、どんな偉人たちの才能も、開闢このかた存在したありとあらゆる天才も、祖母にとっては私の欠点の一つにも値しないと思われたことだろう。だがまた他方では、この幸福感を現在のものとしてふたたび体験したそのとたんに、まるで肉体的苦痛のぶりかえしのように、祖母はこの世にいないのだという虚しさの実感が湧きあがって、それが幸福感を貫くのが感じられた。その実感は、あの愛情について私の抱いたイメージを打ち消し、あの存在を破壊し、過去にさかのぼって私たち

二人が互いにあらかじめ運命づけられていたという事実を消滅させ、私が祖母をまるで鏡のなかで見るようにふたたび発見したその瞬間に、彼女を単なる赤の他人に変えてしまった。祖母は、ほんの偶然から数年のあいだ私のそばで過ごすことになった女であって、ほかのだれのそばでもよかったのだろうし、彼女にとってこの私は、以前は何ものでもなかったばかりか、今後何ものでもないのだろう。

(集英社文庫 第七巻 p338～343)